

研究ノート(2)

16世紀から17世紀初めの西欧の黙示思想 ——ロビン・バーンズの論文「希望と絶望のイメージ： 1500 – 1800年頃の西欧の黙示思想」(前半)について——

足 達 賀 代 子

はじめに

黙示思想の歴史を通覧し、その概要を理解することを目的として引き続き研究ノート(2)を作成する。前回(近畿大学文芸学部論集『文学・芸術・文化』第29巻第2号、pp.73-100)と同じく、*The Continuum History of Apocalypticism* (Abridged Edition by Bernard McGinn, John J. Collins, and Stephen Stein. New York: Continuum, 2003)を使用する。今回は同書第13章、16世紀～19世紀頃までの西洋の黙示思想を論じた“Images of Hope and Despair: Western Apocalypticism ca. 1500-1800”(「希望と絶望のイメージ：1500-1800年頃の西欧の黙示思想」)(pp. 323-53)の前半部分(16世紀～17世紀初頭、p.338まで)を扱う。筆者ロビン・バーンズ(Robin Barnes、1951年3月1日生。デビッドソン大学名誉教授。近代初期ヨーロッパにおけるキリスト教思想史)の黙示思想関連の主著は、The Sixteenth Century Society and ConferenceよりRoland H. Bainton Book Prizeを受賞した*Astrology and Reformation* (Oxford University Press, 2016)の他、*Prophecy and Gnosis: Apocalypticism in the Wake of the Lutheran Reformation* (Stanford University Press, 1988)などである。

バーンズの論考は、西欧文化における中世から近代への移行を「脱神話化」と捉える従来の見方を否定する立場に立つ。すなわち、伝統的黙示思想は近代初期において衰退するのではなく、「近代化」と一般に関連付けられる諸変化の表面のすぐ下で依然として存在感を示しながら人々の心的態度や言説、行動の方向性を形成していくのである。終末と最後の審判が切迫しているという感覚は中世末期から高まりを見せていたが、ルネサンス以降の人文主義の興隆は世界の歴史と年代学研究への関心を高め、また古代の預言や占ト、とりわけ天文観察に基づく占星学の研究を

盛んにした。当時の学者達は、天空に現れる星々の徴（しるし）を聖書の預言の解釈や歴史理解、終末到来の計算に結び付けた。こうした傾向は「時」や「未来」の感覚を尖鋭化し、終末と審判、そして「千年王国」に対する関心をますます高めた。人々は、恐怖と希望が共存し、また次々と入れ替わる緊張状態の下に常に置かれ、黙示思想は彼らの恐怖と希望に形を与えた。以下、バーンズの論旨をなるべく忠実にたどりながら、古くよりの預言やメシア待望など黙示的なイメージや考え方が近代へと向かう時代と密接に関係しあい、自らも変化を受けながら、「近代的」心的態度や言説、行動を生み出す基盤であり続けたことを理解していく。黙示思想がルネサンス—宗教改革から反宗教改革という宗教的、政治的、社会的混迷と激動の時代を形成していくダイナミズムを捉えていきたい。

本ノートの作成方針は前回同様ノート作成者（以下、「作成者」）による全訳（試訳）に基づき、重要部分の要約を行いながら適宜注釈を加えるスタイルをとる。作成者が加えた解説や補足説明部分には括弧内注記を付し、要約部分と解説部分の区別の明確化に努めるが、読者の煩雑を避けるため適宜簡略化する。主要人名には没年及び関連情報を付す。また、バーンズによる膨大かつ詳細な注及び文献リストについては残念ながら割愛する。

ロビン・バーンズ、「希望と絶望のイメージ：1500－1800年頃の西欧の黙示思想」（前半）（Robin Barnes, “Images of Hope and Despair: Western Apocalypticism ca. 1500–1800,” *The Continuum History of Apocalypticism*, ed. Bernard McGinn, John J. Collins, and Stephen Stein [New York: Continuum, 2003], pp. 323–37.）

1 中世から近代へ（pp. 323–24）

最初にバーンズは、中世から近代へと移行するなか、ユダヤ・キリスト教的黙示思想が一般に考えられているほど衰退せず、人々の心的態度や言説、行動の主要な形成要因であり続けたことを概観する。従来の「世俗化」モデルが西洋文化における中世から近代への移行をキリスト教、異教の伝統的神話の崩壊過程と考える一方で、近年の研究はより複雑な様相を提示する。バーンズは黙示思想についても同様のことが言えると考えている。「近代性」の出現に関連づけられる諸変化——宗教

改革、実験的科学の興隆、政治的リベラリズムの発展など——は、西洋の預言や黙示的な考え方の継続的進展と密接に関連している。バーンズは、宗教改革から17世紀初め頃までのヨーロッパの知識人及び庶民が抱いた黙示思想の流れを概観し、危機と終末についての古代、中世の黙示的イメージが変容を受けながら「近代的」態度や考え方を生み出す基盤をいかに形成していったかを示そうとしている。歴史家マージョリー・リーヴスは、「キリスト教思想は誕生以来、歴史に関して悲観的、楽観的両方の期待を自身の中に抱いてきた。歴史の終末は悪の勢力増大として、もしくは千年王国的・メシア的な黄金時代として考えられた」（1993年、p. 295）と述べている。悲観的な予感と楽観的希望、この両極端性は1500年頃には以前にも増して言語化され、浸透していた。近代初期の黙示思想は、この激しい心理的振幅と緊張に形を与えるうえで大きな役割を果たした。ヨーロッパ人の自己意識の新しい形、アイデンティティの新しい概念が形成されるうえで、黙示思想がきわめて形成的（formative）であったことを示すことがバーンズの論考の目的である。

ルネサンス－宗教改革の時代には、続く啓蒙時代に比べ、終末の予期（expectancy）がかなり見られた。17世紀ヨーロッパの「危機」についての研究は、概ね1660年以後における、それ以前の宗教的、知的、社会的緊張の減退をしばしば強調する。しかし、希望と絶望が混在した強い緊張は17世紀後半、18世紀にも持続していた。啓蒙主義的合理主義と懐疑主義による批判にもかかわらず、受継がれてきた黙示思想は従来考えられているほど完全には色あせることなく、かなりの潜在力を維持しつつ、公的言説の表面のすぐ下に存在していたのである。

2 ルネサンス文化における「時」の認識（pp. 324-27）

ルネサンスにおいて「時」の認識が高まったことにより、世界の歴史認識や未来のシナリオへの関心が強まり、聖書の預言の意味を探求する欲求が盛り上がった。古来、預言を読解し、言説化する占卜の手法は多いが、アラビア語文献の翻訳を通して占星学の研究が盛んになると、星の運行など天空の徴（しるし）を終末の予期と結び付ける傾向が高まった（注　バーンズはこの主題を2016年の著書でも詳述している）。1500年前後、ルネサンスの学識がヨーロッパ全域で開花すると、時の経過の認識——個人の経験として、また歴史認識として——が至る所で新たに言語

化され普及した。このことの意味を中世後期のヨーロッパが見せた不安と罪悪感のかつてない高まりと切り離して探求することは困難である。ウィリアム・J・ボウスマが述べたように、「不安とは時に対する人間の心的態度の作用である」からだ (“Anxiety and the Formation of Early Modern Culture,” *After the Reformation: Essays in Honor of J. H. Hexter*, ed. Barbara C. Malament [Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1980], p. 218)。都市文化の複雑化につれて生じた官僚的統制の新しい形や新たな技術（時計や印刷された暦など）、これまでになく曖昧な社会関係が「未来」に対するヨーロッパ人の感覚を尖鋭化し、不安が高まった。

中世末期、ヨーロッパの至る所で激しい恐怖が見られた。文芸における病的な主題の氾濫、悔い改めのための絶望的な行動の数々、反ユダヤ的暴動の頻繁な勃発などがその例である。15世紀末から1520年代の宗教的大変動へと続く時期、こうした社会的苦悶の表れはかつてなく広範に見られた。最後の審判の黙示的預言も同様であった。反キリスト到来の予言やオスマン・トルコによるキリスト教徒虐殺の予言が恐怖をあおり、1490年代には、切迫する神の怒りを説くサヴォナローラ（1498年没）の説教がルネサンス文化の中心地フィレンツェの洗練された都会人の間にさえ宗教的パニックを引き起した。怒れる神への恐怖は、西及び中央ヨーロッパの事実上全地域で猛威を振るった。だが、サヴォナローラのメッセージは、恐ろしい警告と同時に、世界の霊的・道徳的一新後にフィレンツェが果たす「新しいエルサレム」としての役割の約束も掲げていた。盛期ルネサンス期には、恐怖と同時に地上における「未来」への希望の噴出も見ることができたのである。

「未来」における解放の時を待望する預言的伝統は、黄金時代の回帰という人文主義的理想と容易に混ざり合った。人文主義による古典の学問の喜び、言語の力の感覚の強まり、創造的な人間的追求の中に尊厳性を見いだそうとする欲求はすべて、「世界の更新」(*renovatio mundi*) という中世の夢、ヨアキム主義によって伝えられた預言的希望の上に築かれたと言えるだろう。商業と技術の進歩も、キリスト教世界の栄光の到来を確信させた。印刷術は特に知識人の間で神の賜物であると思われた。また、近年の研究は、名高い発見をもたらした航海術の発展に黙示思想の希望的要素を見出している。例えばクリストファー・コロンブスは、西インド諸

島への航海によって全世界が終末までにキリスト教に改宗するという神の計画の成を助けているのだという信念に強く鼓舞されていた。

だが、多くの場合、希望的スキームは破滅への恐怖に対する直接的反応であった。世界を改革する天使的教皇同様、メシア的皇帝についての予言は継続して現れ、強化された。こうした期待は政治的、宗教的生活において知覚されたカオスに対する精神的裏返しであった。当時、人文主義者達を除いては、一般に恐怖が優勢を占めていた。特に北ヨーロッパでは破滅と審判の日への恐怖感が浸透していた。人間には制御不能な事件が頻発し、悪の力は腐敗しつつある世界を蹂躪しているように思われた。反キリストが誕生した、もしくはまもなく出現するという噂もあちこちで聞かれた。ヨハネス・ガイラー・フォン・カイザースベルク（1510年没、ドイツの民衆的説教家）の「キリスト教世界にとって事態が改善する希望は全くない」という絶望的な言葉は、多くの者の心情を反映していたのである。

ルネサンス期に復活した古代の預言や託宣の形式は知識人以外にもかなり浸透し、「未来」についての希望と恐怖を言語化し、増大させる手法をあらためて提供した。人文主義的教養は預言的探求に体系的手法と野心的目的を与えた。復活した古代の占卜方法の中で最も重要だったのは占星学であった。12世紀以降、アラビア語の文献がラテン語に翻訳され始め、占星学はかつてないほど普及した。15世紀末にかけて大量の古典とアラビア語の典拠が印刷され、占星学及び関連実学の知識の普及と洗練に寄与した。天体運行分析は黙示思想と長く密接な関係があったが、占星学の普及に伴い両者の関係は極めて顕著になっていった。このため、例えば、宇宙の歴史に正確な可測的時代区分を与えるアラビアの「グレート・コンジャンクション」（注「コンジャンクション」とは2つ以上の天体間のアスペクト〔黄経差〕が 0° となること。木星と土星で生じる場合を「グレート・コンジャンクション」という）の学説は、預言的思索の新しい精密な努力を鼓舞した。

盛期ルネサンス期、知識層が星に取り憑かれていたことは周知のことだが、既に1500年以前、イタリアやドイツでよく普及していた安価な年刊小冊子やブロードシート（注 16-18世紀に流布した片面刷り大判印刷物。時の話題や俗謡を印刷し街頭で売られた）によって庶民にも占星術的イメージが浸透しており、16世紀前半の世俗文化は古代の星の教えで満ちていた。こうした発行物は、到来が懸念さ

れる危険や個人と自然に内在する生命の均衡に対する脅威へと人々の関心を向けさせた。未来に起こりうる危険への恐怖は、わが子を喰らうサターンの姿で表象されるように、「時」の普遍的破壊性への脅迫観念を反映するようになった。占星学者達はなべて占星学とは神の力と栄光を称賛するキリスト教的学問であると強調した。だが、古代の占トをキリスト教的文脈に適用することにより、宗教的空想力がキリスト教の預言の黙示的要素に集約されることとなった。

著名なヨハン・リヒテンベルガー（1503年没）のような占星学者らによる様々な予測は、預言的熱狂と恐怖をさらに掻き立てた。リヒテンベルガーの『予言集（*Pronosticatio*）』（ハイデルベルク、1488年）は版を重ねた（注 ラテン語版、イタリア語版を合わせて13版以上。リーヴス1993年、大橋訳2006年、p. 449）。その内容は占星学と聖書的、中世的預言の伝統との混合であり、ヨアキム主義や最終皇帝神話も含まれていた。同書はオスマン・トルコによる侵攻など多くの恐ろしい予言とともに、帝権的、普遍的改革への希望も掲げていた。『予言集』の世俗語出版により、預言的文献の世俗語での出版はドイツ語を話す土地で特に増加した。こうした世俗語出版の増加は、中世の黙示思想の多様な流れが集約され流布されるという新局面に入ったことを示している。同書はまた、当時の終末の予期には、知識人・庶民の文化レベルの区別なく、栄光の夢と悲嘆の予言が見られることを示す記念碑的著作である。また、宗教的、政治的主題が極めて混然としている点も重要である。

中世後期を通じてそうであったように、黙示的、千年王国的スキームは既成の政治構造を時に支え、時に転覆するように作用した。従って、例えばリヒテンベルガーの予言が基本的に保守的で伝統的制度を守ろうとした一方で、同時代には所謂「ライン川上流の革命家」（1500年頃）による『百章の書』（注 1513年。神の怒りとメシア的皇帝の出現、皇帝による王国建設などについての大天使ミカエルの預言を匿名の筆者が書き留めたという書物。ドイツ語。コーン1961年、江河訳1978年、pp. 116-24）のような革命的小冊子が現れ、腐敗した社会秩序の打倒と新たな時代の始まりを予言したのである。社会変革を求める運動の中で黙示思想の活動的形態が頻繁に表れる一方で、受動的静観の態度や崩壊寸前の世界に残存している意味と秩序にしがみつこうとする努力と結びついた、より保守的な黙示思想の形態も

あった。

この時代の高まりゆく預言的興奮は、存在の深い不安を引き起こした複合的イメージの中に最も顕著に見られる。こうした不安は元来保守的でも革命的でもない。例えば、1510年代、大洪水に対する恐怖が大陸の大部分、特に中央ヨーロッパを覆っていた。占星学の影響下でなされた大洪水の予言に対し、広範囲な反応が見られたことを示す証拠は多い。恐怖は1524年2月に集中していた。16を下らない惑星の「コンジャンクション」が「水」の星座である双魚宮で生じるとされていたからである（注 ヨハネス・シュテフラー、『暦 (*Almanach nova plurimisque annis venturis inserentia*)』[1499]による予言。キュプリアヌス・レオウイティウスも『大会合の書 1584年まで暦年続く20年間の占筮 (*De conjunctionibus magnis insigniorum superiorum planetarum, Solis Defectionibus et Cometis. Prognosticon ab anno 1564 in 20 sequentes annos*)』[1564]において同様の予言を行い、大洪水は1584年に起ると述べた)。パニックのさなか、冷静さを取り戻そうとした者もあった一方で、1520年代前半に最高潮を迎えた様々な心理的、精神的恐怖を表現するのに大洪水のイメージが役立ったことは明らかである。差し迫るカオス、世界壊滅の感覚によって、「主は信仰あつき者に何をお求めになるのか。」という重大な疑問は極めて切迫した問題となったのである。

3 急進派の奔流 (pp. 327-29)

前節で論じられた歴史認識の高まりと占星学研究を背景の一つとする終末への恐怖と希望のなか、人々は常に強い心理的緊張を強いられ、中には信仰から発する責任感から過激な「急進的」行動へと走り、悲惨な事件を引き起す者もあった。本節ではそうした例が示される。だが、黙示思想は過激な「急進的」行動のみならず、不安の中でキリストの再臨と未来の解放を待望する大多数の者の態度の形成要因としても作用していた。黙示思想を社会革命思想の温床と位置づける考え方を、バーンズは疑問視している。

終末を予期する雰囲気がこの時代を特徴づけていた。初期宗教改革期において、終末への危機感への反応は宗教的、社会的爆発を引き起こし、ローマ・カトリック教会の権威打倒への動きも活発化する中、墮落した世界の最終的浄化を行う戦いを

掲げる運動の中には行動的黙示思想メッセージを中心に据えたものもあった。だが、黙示思想が社会革命論の温床であったわけではない。解放の接近を強調する福音主義や世俗的権威、個人的悔い改めを説く説教はより守勢的な面を呈していたが、こうした静観と待機という受動的な態度も高レベルの心理的緊張をしばしば引き起こした。その緊張は千年王国をもたらす助けとなるために召し出されたと信じていた者達が経験した心理的緊張にも劣らず強烈であった。

「急進的」改革と関連付けられるグループや個人が、地上の千年王国への期待も抱いていたという考え方には慎重であるべきだろう。厳密な意味での「千年王国主義」、すなわちキリストが地上で治める千年間の到来（『黙示録』20章）への信仰は、再洗礼派のオーガスティン・バッダー（1530年没）ら一部の初期改革者に見られた。だが、歴史時間内での千年王国成就への希望は、主流派においても「急進的」改革者においても概して例外的であった。例えばもとはルターの仲間であったが程なく完全に決裂し、1525年のドイツ農民戦争では革命的説教者となったトマス・ミュンツァー（注　ドイツの急進的宗教改革者、再洗礼派、ドイツ農民戦争の指導者。1525年没）も、文字通りの地上の千年王国を期待してはいなかったようだ。むしろ、彼は「選ばれし者」による「神なき者」の殲滅を信じ、「選ばれし者」は使徒的教会を再建し、キリスト再臨と永遠の王国に備えると考えた。ミュンツァーは、行動主義的黙示思想とともに中世神秘主義にも非常に影響されていた。彼は「選ばれし者」の心の中への千年王国の到来を説いたが、神意が天上同様、地上でもなされるようにするのは信仰あつき者達の責務であると強調した。

初期の再洗礼派指導者ハンズ・ハット（1527年没）も同様の見方をしてしたが、彼は世界の最終的な浄化と終末は1528年夏に到来すると計算していた。メルキオール・ホフマン（1543年没）は福音主義から再洗礼派に転じた一人だが、聖霊の最後の注ぎかけと神の民による世界の浄化を説いた。1530年、彼は自身を『黙示録』が到来を預言する「二人の証人」（11章3節）の一人、エリヤであると考えた。彼が1533年と予言したキリスト再臨に先立ち、ストラスブールの町は霊的な「新しいエルサレム」となり、御言葉の最後の勝利への目印となる筈であった。この時代の他の多くの「急進的」説教家や黙示的スピリチュアリストと同じく、ホフマンも中世のヨアキム主義の影響を受けていたようだが、彼の黙示的ヴィジョンの

正確な形ははっきりしない。ホフマン同様、個々の思想家についても、キリストの再臨とは霊肉のいずれなのか、悪の勢力の破滅が最後の審判前に起こり千年王国が地上で成就するのか、再臨が終末をもたらすのかなどの点についての考えを明確に把握することは至難である。正確な黙示的シナリオよりも、ホフマンが説いたように聖霊の最後の注ぎ込みが起こりつつあると信じられていたことのほうが、宗教的、心理的には重要であった。

初期の福音主義改革者達も、歴史時間内での信仰あつき者の勝利という考え方と無縁ではなかった。例えば、フランシス・ランバート（マールブルク大学神学部長、1530年没）によって1528年に発行されたプロテスタント初の『黙示録』の注釈書に、その一例が見られる。また、マルティン・ボルハウス（セラリウスとも。1564年没）も注目すべき初期改革者で千年王国主義者であるが、再洗礼派の急進派や社会革命家ではない。ボルハウスはヴィッテンベルク大学でマルティン・ルター（1546年没）とフィリップ・メランヒトン（人文主義者、ヴィッテンベルク大学ギリシャ語教授、ルター派神学者。『アウグスブルク信仰告白』[1530年]を執筆。1560年没）に師事したが、スピリチュアリズムに一時興味を抱いたにもかかわらず後にバーゼル大学教授となり、尊敬を集めた。1527年、特にメルキオール・ホフマンに影響を与えたとされる著作『神のわざ (*De Operibus Dei*)』でボルハウスは聖書の預言の解釈を行い、大災害と苦悩の時期の到来後、世界の一新と預言の成就が続くと述べた。

要するに、主流派と急進派や革命的思想家達を区別するのは黙示的な終末の予期でも千年王国の到来を説く教えでもなかった。むしろ、既存の体制にとって極めて脅威的であったのは、直接的な靈感を授かったり、信仰あつき者は社会浄化の責務を果たすべきと考える者達であった。社会秩序を脅かす可能性があったのは何よりもこの種のスピリチュアリストの完璧主義、すなわち信仰あつき者達は今、ここで神の意志を直接知ることができ、彼らには終末の出来事のなかで果たすべき積極的役割がある、という信仰であった。彼らは、終末への準備として教会と世界の浄化、悪の根絶を行うことへの責任感を共有していた。

メルキオール・ホフマンは社会変革者ではなかった。このことも、社会体制の危機に際する黙示的感觉には特段固定的な社会的意味がないことを示す例である。だ

が、オランダ及びドイツ北西部の「急進的」支持者達は、ホフマンの思想を自らの行動に利用した。その悲惨な結果が再洗礼派によるミュンスターの反乱（1534-35年）であった。それは近代初期における革命的黙示思想の最も悪名高い暴発であった。ダビデの王国がキリストの再臨に先立つという考えは、ヤン・マティス（1534年没）、ベルンハルト・ロートマン（1535年没）、ベルント・クニッパードルリンク（1536年没）、そしてヤン・ファン・ライデン（1536年没）によって率いられた都市（ミュンスター）を征服した。抵抗した市民は全員追放され、残った者には物品の共有と厳しい道徳規範が強制された。ライデンは「新しいエルサレム」の王を自称し、恐怖による統治を行った。彼は旧約聖書の長老政治の例を引きながら一種の一夫多妻制を制度化した。近隣諸侯達による攻城軍への決死の抵抗の後、1535年6月、ついにミュンスターは陥落した。住民の殆んどは直ちに虐殺され、ライデンらは長々と拷問を受けた。彼らの遺体は晒しものにされ、陰鬱な記念としてその後も長くそこに置かれていた（注 ライデン、クニッパードルリンク、ベルント・クレヒティンクの3名の遺体は鉄製の籠に入れられ、聖ラムベルティ教会の塔に吊された。現在でも3つの籠を見ることができる）。

ミュンスターの反乱は、再洗礼派による初期宗教改革運動に見られた一つの脱線であった。殆んど「兄弟達」（再洗礼派が互いを呼ぶ呼称）は主の再臨を静穏かつ熱烈に待った。彼らはこぞって古い被造物全般に見られる腐敗から身を遠ざけようとしていた。16世紀の厳しい迫害を耐え抜いたメノー派（注 再洗礼派の一派。オランダのメノー・シモンズ [1559年没] が創始した）や他の再洗礼派達の間では、審判からの解放という聖なる約束への信頼が中心であり続けた。だが、解放への信頼自体は、再洗礼派も他の「急進派」も主流派の福音主義的プロテスタントも同じであった。

4 宗教改革における希望と恐怖 (pp. 329-31)

本節ではマルティン・ルターの黙示思想が取上げられる。ルターの「信仰のみ *sola fide*」の神学は信仰者の関心を救済の約束や最後の審判の切迫へと集中させ、さらなる希望と恐怖を引き起した。ルターはあからさまに黙示思想や占星学に依拠したわけではなかったが、彼の神学には黙示的思考方や天空の徴（しるし）による

終末の預言の影響が色濃く見られる。但し、反キリストを個々の教皇ではなく教皇制そのものと捉え、現下の時代を神と反キリストの全面抗争の最終段階と考えた点で、ルターは伝統的黙示思想に独自の解釈を施したといえる。ルターの死後、後継者達は黙示的傾向をさらに強め、ルターによる終末の預言を信奉し、彼を『黙示録』の預言者エリヤと同一視した。同時に、終末の啓示を探求するなか、人々の普遍的知への欲求も高まった。しかし、1620年頃にはこうした傾向への反動が見られた。

革新的黙示思想の発作的爆発より長期的にもっと重要であったのは、宗教改革が広まるにつれて人々の間に表れた希望と恐怖であった。一般にプロテスタントの敬神は宗教的関心の焦点を「伝統的儀式」から「預言と祈り」へと移動させた。その結果、信者達の関心は、将来の救済の約束や到来する最後の審判の脅威、そしてこれらの事が啓示される道筋に集中した。中世の敬神は人間と神との間に様々な仲介者（注 執り成しの聖人など）を配しており、信者達は彼らを通して何とか霊的不安を和らげていた。ある意味、新しい福音主義的説教はこうした霊的統制からの解放をもたらしたが、他方、伝統的チャンネルが可能にしていた霊的安心感は失われた。従って、中世後期に広まっていた預言的不安を宗教改革が克服したと考えることは重大な誤りである。全く反対に、16世紀の改革運動では、黙示思想の再形成と再注目が行われたのである。

主要な宗教改革者中、ルターが最も一貫して黙示的見解を表明した。宇宙の衰退と退化という考え方に依拠して世界の歴史を考察するなど、ルターの終末予期は中世後期の一般的な預言的思想に明らかに影響を受けていた。だが、ルターは黙示思想のきわめて独創的な解釈者でもあった。彼の聖書読解と預言的真理の再解釈は、ドイツ以外でもプロテスタント黙示思想の長い伝統にとってインスピレーションの重要な典拠となった。ルターが新約の希望を復活させたことで、世界の審判と解放が文字通り間近であることが強調された。彼は福音を復活させる自らの運動を神と悪魔の全面戦争の最終幕と捉え、真の信仰者がかつてない脅威と迫害にさらされている時でさえ、神は真理を最後の鮮やかな光とともに世界中に輝きわたらせつつあると考えていた。

上述の通り、ルターの預言的理解の本質的な点は、ローマ教皇制の中に聖書の言

う反キリストを見出したことであった。個々の教皇が反キリスト視された長い中世の伝統から離れ、ルターは教皇制という制度自体を汚れた福音の具現化と捉えた。例えばテサロニケ人への第二の手紙2章の反キリストの預言（「彼（「滅びの子」すなわち反キリスト）は、すべて神と呼ばれたり拝まれたりするものに反対して立ち上がり、自ら神の宮に座して、自分は神だと宣言する。」[4節]）と合致するこの見解は、終末の日々が既に到来していることを示した。ルターは世俗の権威には平和と生命を守る責務があると信じていたが、個々の信者達は救いの日を待ちつつ、増幅していく地上の恐怖にただ耐えていた。こうした本質的に守勢の黙示的な終末の予期はルターの支持者の間で広まった。

ルターは前世紀までの預言的熱狂の中で沸き起こった終末思想の殆んど——最終皇帝の神話、天使の教皇の預言、第三の歴史的配剤についてのヨアキムの夢想、反キリストが隆盛し転落した後の教会の最終的栄光の預言——を拒絶した。彼は福音に役立つと考えたときにはこうした中世の預言的伝統を用いることに反対ではなかったが、終末前の平和な一時期は訪れることなく歴史の混沌は最後の審判まで続き、「時」に終わりをもたらすであろうということに疑問を持っていなかった。ローマとの決裂後も預言に関するルターの考え方の基本は変わらなかったが、晩年、歴史的局面に関心を高め、また、現世の苦悩は一層絶望的になってきていると感じるにつれて、ルターの語調はますます黙示的になっていった。最初ルターは『黙示録』を曖昧で混乱したものと思っていたが、時が経ち、状況が一層混迷し、悲惨さが増すに至り、彼は『黙示録』を預言的洞察に必要な豊かな源泉であると考えようになった。晩年ますます暗澹としてきた彼の発言は後継者達の説教に暗鬱な印象を残し、現世への幻滅や絶望の色を一層濃くした。

終末が接近しているという人々の認識は高まり続けていた。オスマン・トルコによる侵攻は罪深いこの世への最後の懲罰として到来すると思われていたが、1520年代後半頃には一層その実現が間近に感じられるようになった。こうした中、残された時間がいかに短くとも御言葉ができる限り広まるようにと、ルターは俗語訳聖書の完成を急いだ。ルターとその仲間達は終末についての厳密な計算と予言を奨励しなかったが、終末の出来事の順序と時期を先読みしようという欲求はこれまでに増して高まり、福音主義者達の間では時に興奮は熱狂に達した。例えばヴィッテン

ベルク近郊の村でルターの友人ミカエル・シュタイフェルが「世界は1533年10月19日午前8時に終わるであろう」と説教壇から予言したように。

ルターの説教や著述、預言的発言は終末が間近であることを強調していた。1541年、ルターは『世界の年齢の計算 (*Supputatio annorum mundi*)』において「時」が終わりつつあることへの確信を示した。ルターの計算は概ね、人気を博したヨハン・カリオンの世界編年史『年代記 (*Chronica*)』(メランヒトン編。ヴィッテンベルク、1532年)を補完したものである。ミュンスターの事件やミカエル・シュタイフェルの醜聞は公の場での預言を一時衰退させたが、預言的洞察への探求は続いた。ニュルンベルクの宗教改革者アンドレアス・オシアンダー(1552年没)は、『終わりの日々と世界の終末についての推測』(1544年)によってドイツやその他の地域でのプロテスタントによる終末の計算を強く後押しした。オシアンダーは、最後の日と時刻を正確に知ることはできないが、実は神は信仰あつき者達に審判が近付いたら終末の出来事の順序と時期の研究を行うよう命じたのだと述べた。

ルターの世俗語聖書の普及後も、福音主義のプロバガンダは中世の黙示的伝承とイメージにまだ依拠していた。このため、例えば、主の再臨に備えるために来る預言者エリヤとはルターその人のことと解され、ルターの運動は神命によるもので、神なき者達はまもなく罰せられ、信仰あつき者達の解放は間近であるという確信が示された。ヨアキム主義の遺産も忘れ去られることはなかった。例えば1527年、オシアンダーはヨアキム主義者の預言とビンゲンのヒルデガルトによる預言を新たなかたちで出版したが、どちらの預言も最後の審判と世界の終末の前に真の教会が復活することを待望していた。

また、前世紀同様、異形のもの誕生などの「驚異」が終末の予徴と警告と考えられた。ルターとメランヒトンもグロテスクなものの出現の預言的意味に関する出版を行い、ローマ教会のおぞましさと最後の審判が間近であることを啓示する嫌悪すべき生き物、例えば「修道士子牛」や「教皇驢馬」が報告された(注 1523年発行の小冊子。ルーカス・クラナーハの木版画が添えられている。前者は頭巾付き修道服のような皮膚を背中に垂らした子牛の怪物、後者は1496年、テベレ川にて死体で発見された裸の女体をした驢馬の怪物。教皇の居城サンタンジェロ城が後景に描かれている。Lorraine Daston & Katharine Park, *Wonders and the Order of*

Nature 1150-1750, New York: Zone Books, 1998, p. 188 参照のこと)。1524年は大洪水もなく過ぎ去ったが、天空の徴(しるし)は引き続き強い関心を引き続けた。1531年の大彗星(ハレー彗星)の出現は迫り来る神の懲罰の警告として多くの観測者の熱狂的関心を集めた。ルターは人間の運命を予言する占星学には概ね冷やかな態度をとっていた。だが、聖書の預言と星の観測による予測とを完全に区別することは困難であった。ルターはリヒテンベルガーの『予言集』(上掲)の影響力を認め、自身の編集により反ローマ的要素を強調した。より重要なことに、「ドイツの教師」ことメラニヒトンが占星学を進んで受容したことで、後のルター派黙示思想における占星学の大きな役割が保証された。

ツヴィングリもカルヴァンもドイツ福音主義者達の間で広まっていたような黙示的な終末の予期を抱いてはいなかったが、現在が普遍的歴史における決定的瞬間であるという感覚は宗教改革が広まったほぼ全地域で共有され、明確な黙示的確信へと結晶することが多かった。反ローマ主義はなべて、底知れぬ穴からやってくる獣と戦うために最後の審判に先立ち出現するとされる二人の預言者についての『黙示録』11章や同種の記述に貪欲に飛びついた。16世紀が進むにつれて、過去、現在、未来の出来事を正確に分析するために黙示的態度を言語化する傾向が特にプロテスタントにおいてますます高まった。この展開には高度に複合的な原因があった。人文学の全般的普及、世俗の識字率の継続的向上、新興の宗派集団や社会・政治集団が混迷する世界の中で自己のアイデンティティを維持向上していく必要性をより高めたことなどが原因の一部であった。

5 ドイツ・ルター派の黙示思想 (p. 331-33)

ルターの死後数十年間、ドイツ・ルター派における黙示思想は一層明示的になった。ルターの後継者達の熾烈な分派闘争や、カルヴィニズムなど競合宗派の台頭、初期宗教改革の減速などのため、福音主義の説教者や著述家は増大する現世の苦悩への絶望感を表明した。例えば、世界の崩壊について考察を続けたフランクフルト・アン・デア・オーダーのアンドレアス・ムスクルス(1581年没)は、至る所で真の信仰と愛は枯渇し、宗教的、道徳的腐敗が見られ、悪魔はかつてなく活発に動き回るなか、唯一の希望は最後の日における解放の約束の中にあり、その時が近

いと信じることはキリスト教信仰の絶対的中心であると考えた。

ルターの預言の殆どは1530年以降になされ、世界にはいかに短い時間しか残されていないかを繰り返し述べている。こうした不吉な預言は、16世紀半ば以降の混乱期にドイツ福音主義が党派分裂し、多数の敵対勢力の前に活動が弱体化を呈するなか、終末の到来を告げ知らせるために遣わされた真の預言者、「第三にして最後のエリヤ」としてのルターの威信を確たるものとしたようだ。ルター派の黙示思想の言説化として等しく重要であったのは、16世紀後半の初め頃に福音主義の聖職者達によって発行された一連の小冊子である。最も広範に流布したのはバシリウス・ファベルによる『世界の終末の出来事についての必要で有益なキリストの教え』（アイスレーベン、1565年）で、終末接近の豊富な証拠を示し、復活、審判、天国と地獄についての教えを説明している。終末の切迫を確証するため、他の多くの者と同じくファベルもルターの預言への言及を数多く行っている。

黙示思想のさらなる表現は、16世紀半ば以降に大流行した「驚異の書」と呼ばれるジャンルに属する一連の書物に見られる。「驚異の書」は、信仰薄き現世への神の怒りが近く大噴出することや最後の審判の到来が切迫していることを、あたかも旧約聖書の預言者であるかのように熱っぽく語った。最も人気を博した著者の一人がヨブ・フィンケリウス（1582年没）である。彼の『驚くべきしるし』（ニュルンベルク、1556年）は、ルターによる真の福音の復活以来、「驚異」が増大したことを強調した。「驚異の書」も霊的危機を伝えていた。何故なら、「驚異」は古き被造物すなわち世界の秩序崩壊を予言すると考えられたからである。

メランヒトンによって率いられた自然と歴史の人文的研究に影響されて、預言研究者達は年代学や数学、占星学を熱心に適用した。『ダニエル書』の「地に起らんとする四人の王」（7章17節）による伝統的歴史スキームをもとに、アウグスティヌスの時代区分（注『ヨハネ福音書講解』[414-417年、9巻11-16章]で述べられている6時代説、及び『三位一体論』[399-419年、4巻4章7節]に述べられている「律法以前（*ante legem*）、「律法の下」（*sub lege*）、「恩寵の下」（*sub gratia*）の3区分、各2000年を割当てると）や最後の時代が短縮されるという『マタイによる福音書』24章22節（「もしその期間が縮められないなら、救われる者はひとりもないであろう。」）を踏まえ、最後の時代の1500年以上が既に過ぎ去っ

たとえられた。当時、占星学者がこぞって示す諸惑星の不自然な「コンジャンクション」や1572年の新星出現などの天体による徴（しるし）を勘案するならば、終末切迫という結論への反駁は困難だっただろう。16世紀半ば以降、ドイツ・ルター派の多くの者が預言の手段として、また、聖書の必然的補足である自然の真理を読み解く手段として、占星学を全面的に取り入れた。

何らかの全世界的大変動が起こるという予感が高まった1588年すら、常に黙示的緊張下にあった後期ルネサンス期においては、終末の予期が集中する数多いタイミングの一つにしかすぎなかった。知識人による計算の殆どが明確な日付設定を避け、『マタイによる福音書』24章36節、「その日、その時は、だれも知らない。天の御使たちも、また子も知らない。ただ父だけが知っておられる。」という聖句に従っていた。だが、歴史を根拠とした終末の計算はドイツ中産階級の市民文化の中に満ちていた。例えば、ニコラス・ライマルスの『77年以内に世界は滅び終末の日が到来することの、聖書と教父達による確実にして反駁不能な年代学的証拠』と題する著作（ニュルンベルク、1606年）は1596年から起算して終末を予測したが、この計算を不正確と考え、審判は確実に10年以内かもっと早く到来するだろう、と論じる者が多かった。1620年代になっても、聖職者、平信徒ともに、聖書や占星学による証拠を用いて終末到来の日付を遠くない将来に設定した。なかには、聖書の字句や数字の複雑なカバラ的計算と一体となった極めて凝ったものも見られた。

1600年前後の数十年間には、終末の秘密を解明するための熱烈な、だが混乱した努力の数々が突風のごとく巻き起こった。墮罪した現在と未来の救済という二元論が浸透するなか、終末には隠された真理が信仰あつき者に啓示されるという信仰は創造の最も深い秘密を見つけようとする無数の努力を促し、グノーシス（靈的知識）すなわち救済の普遍的知識の探求へと盛上りを見せた。学者達が示してきたように、ファウスト伝説の起源がルター派ドイツにあったことは偶然ではない。黙示的占星学、錬金術、数秘学などの諸学問が真に普遍的な新たな宗教改革への夢をつないだのは、どこよりもドイツ、神聖ローマ帝国と中央ヨーロッパ全域の緊迫状況の中であった。この流れに照らせば、「薔薇十字団」の最初の小冊子（『全世界の普遍的かつ総体的改革』カッセル、1614-15年）の出現に際する興奮の大波は極めて

よく理解される（注 「薔薇十字団」は、17世紀初頭ドイツ、匿名作者による4文書公刊を機に姿を現した秘密結社。架空の始祖クリスチャン・ローゼンクロイツ Christian Rosenkreuz の名にちなむ。4文書とは、上掲書の他、『薔薇十字団の伝説』、『薔薇十字団の信条』、『化学の結婚』を指す）。

1620年頃には預言的狂熱への反動がルター派神学者の間で起こりつつあった。だが、30年戦争（1618-48年）頃までは、黙示的緊迫の雰囲気と神秘的直観への切望は衰えなかった。中央ヨーロッパを覆った戦禍と流血は千年王国主義の隆盛を引き起こした。メシア的支配者と最終的な世界的改宗という中世後期以来のなじみ深い夢も依然見られたが、優勢だったのは幻滅の雰囲気であった。17世紀中葉にはドイツのプロテスタントの間で純粋に主観的な敬虔への動きが見られ、その動きは「敬虔主義」（注 17世紀末ドイツ。教会の形式主義・知識偏重主義に抵抗し、聖書を中心とした内的な敬虔と実践を重んじる一派）へとつながっていく。

6 改革派プロテスタントの黙示思想（pp. 333-35）

カルヴァン自身は黙示的思想傾向を持っていたわけではないが、16世紀中頃以降、カルヴァン派は黙示的傾向を強めた。千年王国への信仰が広まり、最終世界皇帝の預言を復活させる者や天文学的証拠に基づき終末の計算を行う者、千年王国到来に備えて教育改革を説く者などが大きな影響力をもった。

改革派プロテスタントの歴史や預言についての考え方はルター派よりも悲観的でも急進的でもなかったが、16世紀中葉以降はしばしば真に黙示的な形をとった。例えばチューリッヒでは、ツヴィングリよりも遙かに歴史的で字義的な預言の教えが展開され、ハインリッヒ・ブリンガーの『黙示録に関する百の説教（*In Apocalypsim Iesu Christi ... Conciones centum*）』（1557年）などの著作が出版された。続く時代には、改革派は歴史内での神の王国への希望を強めた。こうした傾向は、歴史的な社会改良論に近い積極的な千年王国主義の出現の豊かな土壌となっている。

カルヴァン自身は初期プロテスタント指導者の誰よりも黙示的思想傾向を持っていなかったであろうし、初期のカルヴァン派は当時の事件を明白に預言的な言葉で分析することを避ける傾向にあったが、16世紀後半から17世紀初頭にかけてカル

ヴァンの後継者達は、ローマ・カトリック教会（すなわち反キリスト）との現下の抗争がどのように神の計画に適合するのかを理解することに一層関心を高めた。危機の極みの時代に生きているという認識、そして同時代の出来事と『黙示録』の預言とを相関させる欲求は改革派プロテスタントイズムの大きな方向性であった。

典型的な例はハイデルベルク大学教授ダビッド・パレウス（1622年没）である。彼は『黙示録』を数幕からなる歴史劇として理解し、ローマ・カトリック教会の将来の破滅に関心を向け、また、メシア的皇帝像である「第二のシャルルマーニュ」についての古い預言の維持に寄与した。（注 「第二のシャルルマーニュ」についての預言は、もともとはフランス王シャルル6世の即位（1380年）の際に書かれた。「天使教皇」によって戴冠され、ヨーロッパを征服し、キリスト教社会の敵を降伏させ、ついにはオリブ山上で王冠を放棄するであろうシャルルマーニュの子孫として王を称賛する内容で、「15、16世紀の政治的預言中、最大の流行をみた。」[リーヴズ 1993、p. 330]）。カルヴァン派思想家達の間では、「未来」における勝利を一層明確に示すような『黙示録』の読み方が形成され、ヘルボルンのヨハン・ハインリッヒ・アルシュテット（1638年没）らが寄与した。彼は、カルヴァン派の「科学的」預言への動きを反映して天文学的証拠を踏まえた黙示的計算を行ったが、その頃ルター派の正統派はそうした努力から遠ざかろうとしていた。『黙示録』20章に注釈を付したアルシュテットの主著『黙示録の一千年に関する論考 (*Diatribes de Mille Annis Apocalypticis*)』（1627年）は、1694年に聖徒による支配が完全かつ最終的に完結することを予測する複雑な数学的計算に取り組んでいる。

アルシュテットの弟子ヨハネス・アモス・コメニウス（1656年没）の影響力も大きかった。彼は、千年王国にふさわしい知の完全性へ近づくための普遍的な教育改革理念を促進した。彼の理念はカルヴァン派の間での千年王国信仰の広まりを土台とした一種の進歩的汎知主義へと発展した。オランダのカルヴァン派は保守的で厳密な神学的思想家であったが、彼らの間においてさえ、歴史内での千年王国到来への希望は一般的なものとなった。オランダの改革派は、千年王国到来への預言的確信の高まりの明確な理由を求めた。例えばダニエル・ファン・ラーレンは注意深く千年王国観を展開したが、他の多くの者達と同じくユダヤ人の改宗を重要視して

いた。

7 カトリックの黙示思想 (pp. 335-36)

概してカトリックの終末論は、プロテスタントよりも個人的、靈的で世界の歴史や「未来」にはさほど関心を寄せなかったが、神の怒りと最後の審判への恐怖が底流にあり続けたことは確かである。カトリック諸地域における黙示思想の状況は以下の通りである。

宗教改革の時期、黙示的思考はヨーロッパのカトリシズムから消え去ったわけではなかったが、カトリック教会が伝統的に教会と社会は一体と考えてきたことや預言的探求を抑圧したことにより、黙示的な希望や恐怖は概してあまり目立たなかった。16世紀初頭、戦争で疲弊したイタリアではエリート、庶民に共通して活発で緊迫した預言文化があり、黙示的色彩が強かった。教皇権の敵も味方も共通して神聖ローマ帝国軍によるローマ劫掠（注 1527年5月、神聖ローマ皇帝兼スペイン王カール5世の軍勢がイタリアに侵攻、ローマで教皇軍と衝突した事件。教皇クレメンス7世はサンタンジェロ城に逃げ込み、教皇軍は敗北した）を終末論的に捉えた。1530年頃を過ぎると、預言的雰囲気は保守的な聖職者組織と激しく対立し、預言的説教家や預言的な書物を発行する印刷業者に対する締付けは強くなったが、受け継がれてきた預言的態度やイメージを払拭することは勿論できなかった。

カトリックの預言は時にルターらプロテスタント指導者を反キリストと見なした。異端の急速な広まりは終末切迫のしるしと見なされた。メシア的皇帝の預言は依然流布しており、例えば1540年代、ウィーンの医者で歴史家のヴォルフガング・ラツィウス（注 ジュゼッペ・アルチンボルドの絵画、『司書』[1566年]のモデルとされる）は、伝統的千年王国的希望を主としてカール5世（1588年没）に集約し、フランスでは同じ希望がフランソワ1世（1547年没）に集まった。中世の天使的教皇の夢想と同じく、普遍的カトリック君主という主題は17世紀に入っても極めて強く存続し続ける。反宗教改革の期間、特にヴェネチアにおいてヨアキム主義とその系列の継続が見られ、改革を行う偉大な教皇という考え方に積極的な関心を示したが、それは教皇権に対するヴェネチアの抵抗と明らかに結びついていた。

黙示思想は修道会においても重要な役割を持っていた。ヨアキム主義的預言は依然、多数のカトリック思想家達の希望を支えており、例えばイエズス会士達は彼らの修道会を神命により歴史の最終幕で重要な役割を演じる預言的エリートと考えていたし、フランシスコ会の海外伝道は、最後の全世界的キリスト教会の栄光と千年王国への信仰に明白に影響を受けていた。また、学者達は、聖書の該博な注釈の中に隠された来るべき黄金時代への希望を見出して慰めを得た。

フランスでは、カトリック教会による公然たる預言への抑制はあまり顕著ではなかった。1560年頃以前のフランスのカトリック信者が抱いていた終末への恐怖と苦悩がどの程度であったかをめぐり学者達の考えは分かれているものの、ピエール・テュレル（1547年頃没。主著『絶頂、つまりは世界の終わり（*Le Période, c'est-à-dire la fin du monde*）

[リヨン、1531年]）やリシャール・ルーサ（生没年未詳。主著『諸時代の状態と変転の書（*Livre de l'estat et mutation des temps*）

[リヨン、1550年]）ら多数の影響力ある説教家や著述家達は、現下の出来事と聖書の預言の間に無数の相関性を見出し、アラビア占星学の「コンジャンクション」理論に部分的に依拠しつつ、終末は既に到来していると述べた。最後の審判に関するフランスでの説教は陰鬱な警告の形をとることが多く、救われる者は極く少数であろう、と説いた。こうした警告は歴史の枠組みや自然の出来事への関心よりも個人的な悔悟へと結びついた。この意味で、フランスのカトリック信者の間の雰囲気は終末的ではあったが、ドイツのプロテスタント達の間で見られたほど明確に黙示的ではなかった。

フランスでは、占星学的予言はドイツにおけるほど浸透しなかったが、ノストラダムス（1566年没）が名声を得始めた1550年代までには俗語による暦が普及し、災禍の切迫を印象づけるのに役立った。ノストラダムスは1565年の惑星大衆合をキリスト再臨の先駆けと示唆した一人だったが、彼自身は黙示的警告にも慰めにも特に関心はなかった。ユグノー戦争（1562年頃-95年）で行われた虐殺やカトリック同盟の結成（1588年-89年）は、本質的には終末への危機感に対するカトリック側の集団的対応であったと論じられている。

黙示思想に基づく世界の終末を主張することは、カトリック諸地域においてしばしば異端と結び付けられた。1540年代、ヨアキム主義の影響が強く見られたギロー

ム・ポステル（1581年没）の世界改新についての考え方はイエズス会に容認されず、彼はイエズス会から追放され、後に狂気と宣告され投獄された。他方、世紀末にかけて、統一された平和な世界像を提示したトマゾ・カンパネッラ（1639年没）やジョルダノー・ブルーノ（1600年没）らの思想の中には千年王国主義が見出されたが、そうした預言的な考え方よりも主として彼らの形而上学的、自然科学的思想が危険視され、異端の嫌疑を受けたのだった。

反宗教改革期のハプスブルク治下、預言やト占は民間魔術や教義からの逸脱とますます関連付けられるようになり、カトリックの聖職者達はこれらと闘い続けた。黙示思想はプロテスタントによる抵抗を支持する千年王国的希望という形で主として表面化した。プロテスタントの千年王国主義は、ハプスブルク家の勝利（注1620年、三十年戦争の初期、白山の戦い [ワイセルベルクの戦いとも] で神聖ローマ皇帝フェルディナント2世に背いたボヘミア、ドイツのプロテスタント同盟軍がオーストリア、ドイツ、スペインのカトリック連合軍と戦い、後者が勝利した）の後、少なくとも世紀末頃まではこの役目を果たし続けた。17世紀、ヨーロッパのカトリック諸地域では、庶民達も神命による世界一新についてはあまり期待を示さなかった。

概してカトリックの終末論は個人的、靈的であり、世界の歴史や「未来」にはさほど関心を示さなかったが、神の怒りと最後の審判への恐怖が根底にあり続けたことは間違いない。それ故、17世紀中葉にもまだイエズス会士フルウィオ・フォンターナは外遊先のイタリア、スイス、オーストリアでこの主題で説教を行っていた。加えて、「裁きの日の前の十五のしるし」など、聖書に記載がないという理由でプロテスタント側によって棄却された幾つかの中世の伝統をカトリックの預言は内包し続けていた。

8 英国における改革派黙示思想 (pp. 336-38)

最後に、独自の軌跡をたどった英国の改革派黙示思想について述べられる。16世紀中頃より大陸の黙示思想の影響を受ける一方で、バイルやフォックスは英国の宗教改革の神意に叶う特別な位置づけを主張し、続いてネイピア、ブライトマン、ミードらが独自の終末計算や黙示思想を展開した。ピューリタニズムの台頭に伴

い、千年王国主義は政治的、革命的色彩を帯びた。ピューリタン革命への失望が広がり王政復古がなされると、相次ぐ災禍の影響もあって社会不安が起り、人々は安寧を求め、政治的な預言的思想は後退した。

英国における改革派黙示思想の伝統は独特の軌跡をたどったが、それは多くの点でピューリタニズムの台頭と平行な関係にあった。英国の著述家達は、16世紀中葉にはローマ・カトリック教会を反キリストと見なし、清められた福音に関する説教を重要視するドイツの黙示思想を翻訳、翻案するようになった。メアリー一世治下（1553年-58年）のプロテスタント追放はピューリタニズム形成に寄与した（注 メアリー一世による迫害からジュネーブに逃れたW.ウィッテンガム[1579年没]らのプロテスタント神学者達は、カルヴァン神学の強い影響下、1560年に聖書を英訳した。この『ジュネーブ聖書』は、後にピルグリム・ファーザーズがプリマスに携行したとされるなど、ピューリタニズムに大きな影響を与えた）。ピューリタニズムにおいては、反キリストに対する闘いが真の教会と神の民の明確な特徴であった。

英国の初期のプロテスタント達は、ルター派ドイツで浸透していたような現世への悲観を示していたが、ジョン・ペイル（1563年没。黙示思想関係主著『二つの教会の姿（*The Image of Both Churches*）』[1547年]）やジョン・フォックス（1587年没）らの著作は、神の摂理による歴史の文脈の中での英国の宗教改革の位置付けに特別な関心を向けていた。フォックスは『殉教者伝（*Actes and Monuments*）』（英語版 1563年）で、キリストの王国到来に向けての英国の中心的役割を述べた。彼らはあからさまな千年王国的見解は示さなかったが、確信と戦意に満ちた黙示的希望の中心に英国と英国のプロテスタント達が屹立している、と考えた。この考え方はスペインのアルマダの敗退（1588年）の頃には既に明示されていた。

最後の審判はエリザベス朝の説教の中心的主題であった。1583年、ロンドン主教エドウィン・サンズ（注 1588年没。政治家、植民地建設者のサー・エドウィン・サンズ[1629年没]と詩人ジョージ・サンズ[1644年没]は息子）は世界の終末の到来についての伝統的で悲観的な信念を表明し、「至る所で崩壊が生じている、サタンはかつてないほど活発に動いている」と述べたが、こうした悲観主義は

聖書の預言の読み方をまだ大陸に依拠していることの反映とも言えた。しかしながら、世紀末に向けて英国の著述家達は自信と独立心を顕著に高めていく。英国と大陸の両方で広く読まれたスコットランドの数学者ジョン・ネイピア（1617年没。対数の発見者）の『黙示録全体の明白なる開示（*A Plaine Discovery of the Whole Revelation*）』（1593年）は、キリスト降誕からの詳細な年代史と『黙示録』に表れるイメージの体系的分析を行っている。決定的な日付設定を避けているが、ネイピアは無数の詳細な考察を行い、1639年にローマの反キリストが没落し、1700年までに最後の審判が到来する可能性を示した。この考え方は、大いに好評を博したアーサー・デント（1607年没。ピューリタン）の『ローマの滅亡（*The Ruine of Rome*）』（1603年）でも示された。

長老派のトマス・ブライトマン（1607年没。黙示思想関係の主著は『黙示録の啓示（*Apocalypsis Apocalypseos*）』[フランクフルト、1609年、各地で重版多数]）は極めて影響力ある著述家の一人で、彼の黙示研究により英国における千年王国思想の最盛期が到来した。彼は、至福千年の時代は既に進行中であると考へ、反キリストの最終的敗北と地上の王国の最盛期に至るまで継続的勝利が真の教会にもたらされると考へた。特にピューリタンにとって重要だったジョセフ・ミード（1639年没）の『黙示の鍵（*Clavis Apocalyptica*）』（1627年）は、全ての成就是まだ未来のことと見ていた。両者とも、英国の社会と文化に深い影響を与えた確信的、戦闘的プロテスタンティズムを奨励した。ピューリタン革命（1642年）に先立つ数十年、アルシュテットら大陸の権威達の著作の翻訳がこの流れに加わった。庶民の間では占星学に基づく暦が普及しており、終末の予期を表現する主たる手段であった。

1630年代までに千年王国への期待が神学的、社会的にどれほど重視されるようになったのかという点については、まだ論議がなされている。しかし、それは革命的コミットメントから霊的慰めにいたるまで、多様な必要を満たす精神的枠組みとして広く受け入れられた。審判の日の切迫への恐怖と、地上の楽園の到来への希望とが共存し、もしくは急速に入れ替わった。多様な黙示的シナリオが出回り、確信的千年王国主義者にとってさえ預言的予期と政治的立場との関係は単純ではなかった。しかし、プロテスタント達には反キリストは国教会と国家の両方に対して力を

回復しつつあるように思われた。ピューリタンの新世界への移住は、神の意にかなう社会への千年王国的希望の高まりの表現でもあった。選ばれし者は新世界で主の道を正しく準備することができるであろう、と考えられたのである。

ピューリタン革命と空位時代（1642年頃-60年）の動乱の間、世界の歴史の転換点という感覚は最高潮に達した。1643年、ある説教家は「激震の日々である、しかもこの激震はあまねく生じている」と叫んだ。プロテスタント達を議会制もしくは共和制政府及び「神の王国」の樹立に結び付けるうえで、千年王国主義は不可欠な要素となった。スチュアート王政への熱心な敵対者達は、彼らと王政との抗争はキリスト側と反キリスト側の決戦であり、聖書の預言的記述と相関している、と公言した。急進的独立派は、長老派による非難を『黙示録』13章の獣のしるしと考へ、真の信仰者の良心にとっての脅威と捉えた。

チャールズ一世の敗北（1646年）と1648年以降の不穏な情勢に伴い、預言的希望は一層大きな膨らみを見せた。レヴェラーズ（水平派）、ディガーズ（真正水平派）、ランターズ（喧噪派）といった急進的グループの計画は革命的千年王国主義に強く結びついていた。この時期の急進的な終末の予期のうち最も有名なのは第五王国結社（注 急進的ピューリタンの一派。アッシリア、ペルシャ、ギリシャ、ローマに続く、キリストが再臨して聖徒とともに千年間統治する第五王国の時代が間近に迫っていると信じた）で、第五王国時代をもたらすための武力貢献は信者の責任であると考えた。同結社は1650年代初頭には急速に衰退した。きわめて混乱し緊張した雰囲気の中、マグルトン派（注 1651年頃ロンドンのロドウィック・マグルトン [1698年没] とジョン・リーヴ [1658年没] が始めたピューリタンの一派）、フィラデルフィアンズ（注 ジョン・ポーディッジ [1681年没] を中心とした17世紀英国の非国教徒グループ）、クエイカー派（注 17世紀中頃ジョージ・フォックス [1691年没] が創始したキリスト教の一派）といった多種多様な急進的宗教グループが台頭したが、それらは世界の霊的崩壊への不安を概ね共有していた。ジョージ・フォックスと初期クエイカー派の多くの同志達は、王国は信者の心の中に霊的に到来するのだと強調したが、クエイカー運動の源はこの時代の黙示的興奮と切り離しては理解され得ない。

改革への失望が広まり、1660年に王政復古がなされると、黙示的預言への態度

の中にも失望が明らかに見られるようになる。カルヴァン派のスコットランド人ジェームズ・ダーラムの『「黙示録」注釈 (A Commentary on the Book of Revelation)』(1658年)はあまりに厳密な解釈を避け、千年期については霊的な見方を主張し、説論と慰めという預言の目的にとっての『黙示録』の価値を強調している。王政復古後、メシア的王としてチャールズ二世を迎えた者も存在したものの、あからさまな政治色を帯びた預言的見方は後退した。もっと広まっていたのは獣の数(『黙示録』13:18)を含むため長らく恐怖と希望の的であった1666年という年への関心であった。ペストの大流行(1665年)やロンドン大火(1666年9月2日から7日までにシティの5分の4が焼失)の災禍は、天上的無政府状態の夢想よりも秩序と安全の約束への欲求を生じさせた。

参考文献

- Barnes, Robin B. 2016. *Astrology and Reformation*. New York: Oxford University Press.
- Cohn, Norman. 1961, 1970. *The Pursuit of the Millennium: Revolutionary Millenarians and Mystical Anarchists of the Middle Ages*. New York: Oxford University Press. (邦訳『千年王国の追求』江河徹訳、東京、紀伊國屋書店、1978年。)
- Daston, Lorraine & Katharine Park, 1998. *Wonders and the Order of Nature 1150-1750*, New York: Zone Books.
- McGinn, Bernard. 2003. "Apocalypticism and Church Reform: 1100-1500." *The Continuum History of Apocalypticism*. Ed. Bernard McGinn, John J. Collins, and Stephen Stein. New York: Continuum, 273-98.
- Patrides, C. A. & Joseph Wittreich. 1984. *The Apocalypse in English Renaissance Thought and Literature: Pattern, Antecedents and Repercussions*. Ithaca: Cornell University Press.
- Reeves, Marjorie. 1993. *The Influence of Prophecy in the Later Middle Ages: A Study in Joachimism*. 2nd ed. Oxford: Clarendon Press. (邦訳『中世の預言とその影響 ヨアキム主義の研究』大橋喜之訳、東京、八坂書房、2006年。)